キュウリ、鹿児島県の豆というようなものに比べて非常にウェイトが低い、そこで、是非こういう本県に最も適した品目を今後はひとつ出していきたいというように実は考えているわけです。それには農協の体制なり、出荷の計画なりが充分行なわれてなければならないわけですがいまのところ農協の共販の扱いを見ますと一億円以下が大部分でしたが、まあ昨年、一億円以上が五農協ありましたがことしは十四農協が一億円以上扱えるというようなことになったわけです。今後は農協で扱えば最低一億円以上扱えるような産地体制にもっていきたい、このことによって量質ともに揃った産地になるんじゃないかと考えているわけです。

◇ 所得の六〇%は野菜で

――野菜の価格が非常に変動するということは大きな問題ですが、私はそれにはやはり生産面に大きな問題があるんじゃないかと思うわけです。産地の野菜づくりを実際見てみますと非常に経営規模が小さい、いいかえると副業的な野菜づくりが多い、これは全国の統計からみますと十万以下の所得の野菜農家が、約六五%を占めている、三十万以上の所得を上げる人はわずかに一〇%ていどなのです。云いかえれば副業的な野菜づくりという形、価格によって、年々その作付面積の変動が大きく動いていくという問題があるのではないかということ。それからもうひとつの問題はやはりこれは野菜特有ですが気候、災害に非常に弱いという特徴があるわけなんです。これから産地を近代化していく場合、やはり生産の施設を合理化していくということで進めて、価格の安定を図るとともに、これから最も大事なことは、産地体制のいわゆる組織を強固にしていくということと、産地の団地化を促進すること、が問題ではないかと考えるわけです。野菜の生産出荷安定法というようなものも、そういう組織を強くして、需要に応じた出荷をたてていくということが、今後のねらいでもあるわけですが、そのためにはやはりどこでも野菜をつくるといことではなく、本当に野菜に適した産地で、大型の産地をつくっていくということ。また個別の経営におきましても、やはり所得の六〇%以上位を野菜で占めていくという、そういう農家の人達によって産地いうものが形成されていかなければならなんじゃないかと、思っているわけです。

そのようなことから、やはり今後熊本県の出荷体制というものについてもっと研究をして、よりよい出荷体制をつくり上げていかなければならないと思っているわけです。

そこでプリンスメロン、あるいはスイカ、トマトなど、熊本県が今出しているものの出荷の体制はどうかといった点について、市場側のご意見をお聞きしたいんですが、東京の上原さんいかがですか……。

◇ ピラミッド型よりも かまぼこ型を……

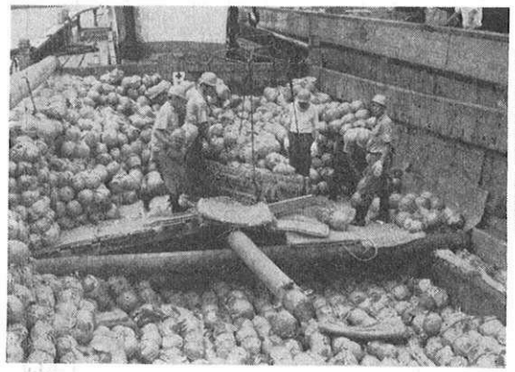
上原 ご承知のように最近施設栽培というような中での技術革新が出来てきていますので、私どもの立場から申し上げることが一方的なように取られるおそれもありますが、実は県内各地域で生産をされていますプリンスメロンについては、一つの出荷プログラムをつくってもらいたいと、考えているわけです。最近の作型によれば、従来のような出荷のプログラムというのは大きく変ってくるだろうというような面も、実は心配しているわけですが、やはり天然を利用した生産のあり方と、更には技術の革新による生産のあり方と、非常にむずかしい問題があろうかと思います。が、県内、各産地の出荷時期が同じであるというようなことは、なるべく避けてもらいたいというような考え方をしているわけです。

話は前後しますが、今まで六月の十日前後に集中していたものを、かまぼこ型の出荷体制に変えていただくためには、作型の改善が必要だということはもちろん私たちも強調してきたわけです。もちろん六月上旬のピラミッド型の山をくずすということには変わりはないわけですが、その変え方が問題でしょうね。例えば、五月中旬に全部集中してしまうというようなことであってはならないと思うわけです。ですからそういった出荷体制の改善策の一環として、もう少し、地域なり地帯なりの区分出荷を正確にやるべきではないかという気がするわけです。それから出荷体制で問題になるのは輸送関係ではないかと思います。

昨年、はじめてのケースでしたが、例のスイカ列車が京浜に専用で走ったわけですが、途中やはり東海道線の事故などによって若干混乱があったわけです。特にプリンスメロンの場合、一箱ずつを通運業者が貨車からトラックに積み、またトラックから市場に搬入し、それを降ろすというようなことで、一台の荷さばきが長い間かかるということ、こういった問題も関連性をもって、できれば改善をしていただきたいことです。東京は熊本県からかなりの遠隔地ですので、プリンスメロンといえどもどちらかというと時期的にも軟弱な果物でもあるし、いたみやすいので、できるならトラック輸送ということが希望としてはでてくるわけです。

◇ 果形が気になるスイカ

しかし全面トラック輸送ということになりますと、運賃の高騰によるいわゆるコスト高という問が出てまいりますのでトラック輸送については時期によって、あるいはその年の気温などによってある程度ケースバイケースにこれを取り上げていただきたいと考えております。それから出てまいります早期販売用のものは、従来実績をみますとまた、コンマ以下で、本格的に早期出荷をねらった栽培というのはことしがはじめてではないか見ております。昨年まで、六月中旬以降に入ってきましたスイカを見てみますと、品種にもよりますが、特に東京の場合だと、果形のくずれを一番嫌うわけですね。この果形を立派に仕上げていただくことがいかに必要であるかを痛切に感じるわけです。



＜レタスの海上輸送＞

お話しによりますと関西市場では末端の小売り屋さんが、スイカを切り売りをするために、比較的果形のくずれには関心がうすいということですが、少なくとも関東では果形のくずれというものは中がすいているというようなことがありますので、極端に嫌うわけです。そこでなるべく果形が整うような栽培技術と、果形が立派な品種、系統のものを選択をしていただきたと思うわけです。特に早出しスイカについては、段ボール容器に中仕切を入れていただき、これを輸送途中にあまり荷くずれがしないようなあるていどのパッキングなり、ワッティングなどを使って、着荷状態がいいような形に努力をしていただきたいのです。六月中旬以降、あるていど価格の下がった時点では、やはりコストダウンというようなことも関連性が出てまいりますので、従来使われましたような、紙袋の包装でも結構ではないかと思います。

――大阪方面に出まわっていますトマト、カボチャなどについてはどうですか、塩飽さん……。

◇ スーパーで巻返す 〝熊本カボチヤ〟

塩飽 私たちの方では関係のある会社が寄りまして、熊本県青果物研究会というものを定期的に開いている?わけですがこれは、それぞれ野菜部会、果実部会に分かれていろんな問題を討議したり、お互いに意見を出し合ったりしてるわけなんです。ところで、トマトとカボチャの問題ですが、この冬トマトの末期で春トマトがちょうど出てるということで、いままでですと相当この出荷期と出荷期の間があったわけですが、最近は特に間がなくなってつながってきたと思います。私たちの研究会で検討している問題ですが、将来は少なくとも重点品目を周年供給してもらおうじゃないかという意見も出てるわけなんです。そのために非常にいい傾向として、現在少なくとも十一月から越年して六月頃までつなぐという体系が出来ると思います。

内容的に熊本のものはたしかに市場価値が高まってきたといえるんですけど、やはり対抗産地があるということで比較されます。そうなった場合、高品性ということでもう一歩レベルアップをしてもらわけなければならないんじないかと思うわけです。個人差とか農協格差とか申しますが、全体のレベルアップが出来てないような感じがする。要するに販売区間の延長化と同時に内容、いわゆる商品性をうんと上げていただくようひとつお願いしたいのです。

カボチャの場合は、今まで九州からくるカボチャは宮崎の独走だったんですけれども、二、三年前から熊本早生黒皮種が育種されて出荷されるようになり、熊本産カボチャが非常な巻き返しを行ない供給が目立ってきたこと、特に昨今は小売り商だけではどうも販売の拡大ができないんじゃないかという面から、大きなスーパーが本格的にカボチャの販売にかかり、スーパー面におけるウェイトが大きくなってきているということから、相当な期待がもてる品目だと思います。

ただ、内容をみた場合に、昨年までの状態では五月上旬ごろからぼつぼつやってきて、六月いっぱいということで、いま少し、ひと月位は供給が出来ないものかということが一つ。それと夏場から秋口にかけての供給ということがもういっぺん考えられないものかということ。現在は夏場の北海道カボチャのあと宮崎カボチャの供給だけなんです。その夏から以降、秋にかけて更に冬場にかけてということで、これまたできれば秋から翌年の夏までつなげる体系はできないものかという感じがするわけです。

最近は従来のカボチャと違って非常に人気が出て、シーズンによっては宮崎と変わらん位のレベルアップが出来てるということですから、この点は問題ない。したがってトマトの場合は品質のアップと年間供給販売体系を、カボチャの場合も少なくとも長期販売の体系ができないかということが期待されるところだと思います。